

山の繪本

尾崎喜八詩文集 4

尾崎喜八詩文集

昭和34年5月6日 第1刷発行

昭和38年9月25日 第2刷発行

¥ 700

著 者 尾 崎 喜 八

発行者 久 保 井 理 津 男

電話(231)4008 振替 東京 92472

発行所 株式会社 創 文 社

東京都千代田区代官町2

落丁・乱丁本は取替えます 堀内印刷・橋本製本

目次

絵のように

たてしなの歌

念場が原・野辺山ノ原

花崗岩の国のイマージュ

神津牧場の組曲

御所平と信州峠

大蔵高丸・大谷が丸

蘆川の谷

新年の御岳・大岳

高原にて

一日秋川にてわが見たるもの

画因と素描

山への断片

木暮先生

子供と山と

三

四

五

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

「山日記」から

二〇九

美しき五月の月に

二一〇

山と音楽

二一一

高山植物雑感

二一二

追分の草

二一三

胴乱下げて

二一四

ハイキング私見

二一五

「山に憩う」友に

二一六

秩父の王子

二一七

松井幹雄君の思い出

二一八

秩父の牽く力

二一九

春の丘陵

二二〇

一日の王

二二一

附録 山と芸術

山と芸術

二二二

或る単独登山者の告白

後記

絵の
よう
に

たてしなの歌

君の土地。それは無数の輻射谷に刻まれて八方に足を伸ばした、やはり火山そのものの肢体の上の耕地であろうか。或いはもっと古く、埋積し、隆起した太古の湖底の開析平野と、その水田に、今、晩夏の風が青々と吹きわたる河成段丘のきざはしであろうか。

若しおのが訪れ、おのが歓待されたひとつの土地に特別な愛と関心とを持ち、帰来その感銘を反芻し、思い出すことによって忘却の箇所を埋め、選択し、機杼し、そこから世界の美の実証を織り上げることが私のような旅人の仕方だとするならば、地理学を愛してなおかつ無知な私は、その無知と愛とのために、君を生み君が生きているその美しい土地への讃歌の冒頭で、すでに空しくも思いまどうのだ、優しい心の友よ！

われわれは蓼科山からの帰るさに、その北麓を八丁地川に沿うて降っていた。昔の人の素朴な適切な命名にはほえまされる畳石から蘆岩の部落へかけて、路傍の崖のところどころ、見事に露出した火山岩の板状節理が見られ、そのあたり、農家の屋根は瓦でもなく萱でもなく、概ねあの鉄平石という石の薄板で葺かれていた。また対岸はるかにその岩を切り出す石切場が見えて、原

始的な橋梁の突桁をおもわせる岩石の天然の庇が幾つか、折からの洪水のような午後の日光を横ざまに浴びて、緻密な、爽やかな明暗の諧調を織り出していた。

そこから一里余りを降った望月で、或る日もっと広々とした眺望が欲しく、私は坂を上って丘の上へ出た。蕎麦が花咲き柿の実がいよいよ重くなる信州の夏の終り、丘の上は清朗な風と日光との舞台だった。北方には絵のような御牧が原の丘陵を前にして、噴煙をのせた浅間から烏帽子へつらなる連山の歯形。南にはその美しい円頂と肩とを前衛に、奥へ奥へと八ヶ岳まで深まりつづく蓼科火山群と、豊饒の佐久平をわずかに隠したその緩やかな裾。さらに西の方にはきらきら光る逆光につかった半透明の美が原熔岩台地、そして東は遠く淡青いヘイズの奥に螢石をならべたような物見・荒船の国境連山と、其処に大平野の存在を想わせる特別な空の色。それは晴れやかな、はろばろとした憂鬱な、火山山地の歌であった。牧畜と葡萄^{ヴラジシヤ}收穫と、荒い素朴な恋愛と、悠久な地平のうねりとから生れるあのモルヴァンの、セヴェンヌの、またオーヴェルニュの歌であった。

しかしそんな夢想につかって日蔭の坂を降りながら、私は丘の横腹の崩れた箇所^あに注意をひかれた。其処では斜面の一部がすっぽり剝ぎとられて、丸味を帯びた石を象嵌した砂土の層が露出していた。それはちょうど脂肪をつめた腸詰の切口であった。それは単純に火山屑の地層であろうか。それともかつて上州猿ガ京で、甲州上野原附近で、また多摩川西岸の丘陵で私の見たものと同じであろうか。私は大地の遠い過去を思い、想像も及ばぬその未来に心を馳せた。一切空。しかし心は不思議に澄んで謙虚であった。そして現在よ。現在は永劫の時空の流れの中で相闘^あぎ、

相抱き、生成し、破壊し、現に私の眼前でさえ、地表の生傷の上にいちはやくその場所を占めようとするかのように、生命の酒のきらめく夏の真昼、すでにナンバンハコベ、タチフウロ、ヨモギの類が花咲き、もつれ、生茂っていた。

そうだ。現地の地理学について結局私は何も知らない。私の観察からは何の結論も出はしない。私はただ見たただけだ。そして私にできるのは、驚きをもって見、見る喜びに鼓舞されて、なお一層よく見ようとすることである。

君の土地、それは本当に美しい。その美の所以を、その秘密を研究し看破するためには、もっと長い滞在が必要とされ、遙かに深い専門的な造詣と高尚な叡智とが要求されるだろう。

今日の詩人は、その善き野心にも拘らず、その詩的汎神論的地文学への夢想にも拘らず、決してタレースたることもヘラクリートスたることもできず、また実到一个のゲーテたることさえできない。イオニアの風は古代希臘の春とともにその白い廃墟の中で死んだ。現代は分化の時代、限界固持の時代、一切の食出し不能の時代である。

とは云え詩人はなお到るところに彼の祖国を見出すことができる。彼が呼吸するところ、彼がその魂を通して見、知り、慈むところ、すべて彼の祖国であり得る。

一管の「魔笛」を彼は持つ。その調べは天使のような音色をもつて人と人とを結ぶ歌である。はなればなれの魂に、共通の故山の使信をはこぶ歌、孤立した因子の群を調和して、相互依存の原理とその深い喜びとに目覚めしめるコスミックな晨朝歌である。

千百の思い出が一時によみがえる。それは我れ先にと駆けつけて来る。

蓼科高原幾里四方の秋草や白樺が、「僕たちのことを忘れるな」と一斉に蓬々とそそけ立つ。私の渴を癒やしてくれた淋しい高地の用水が、その八重原^{もろはら}・塩沢^{しおざ}の長い水の背をうねらせて、
「おれたちのことまた……」

「私だって」と菅原部落の猪口に一杯の蜂蜜が甘ったれる、「私だってあなたに元氣をつけて上げました」。

草夾^{フロック}竹桃^{ツクス}や萩の匂いをぶんぶんさせながら、彼女は懸命に自分を思い出させる。

あの土地で私と知己になった一切の物が、ただの一触れ、ほんの一瞥の果敢ない縁^{えん}の絲^しにさえ縋^{すが}って、どうか自分を思い出されようと進み出で、最初の選抜にあずかろうと、口々に自分自身の理由を述べ立てる。

みんなもつともだ。だが、少し私を落着かせてくれ。

私はいきり立った彼らの氣をちょっと抜くために、振り向いて小さなオルガンに向う。私は、スエーデンでは誰でも知っている、誰でも熱い血をわかすあの歌を、「ああ、ヴェルメランド」を微吟する。

いけない！ 最も悪い！ 最も悪い！ 最も悪い！ 「ヴェルメランド」のような、ひとつの美しい平和な祖国に対するその民族の愛と誇りと、の歌は、電流のように民衆全体の心臓を貫いて、彼らを一般

的興奮の大渦^{グレート・トルネード}巻に巻き込んでしまうのだ。

私の衷で思い出の群衆が一斉にスクラムを組んで、彼ら自身のヴェルメランドを歌い出す。これではいけない。

では、別のだ。今度は「ロッホ・ローモンド」

すると忽ち翡翠いろの霞をまとった東部信濃の山々がその巨鯨の背をもたげ、愛すべき果樹園や人蔘畑の丘がならび、日照りささめく川の流れが斉唱をはじめ、モンペを穿いて姉さんかぶり、桑籠を背負った佐久娘が伏目勝に道を行く。それはかりか、かつての秋の念場ガ原・野辺山ノ原の一人旅に、往きずりの言葉を交した若い人妻までが顔を出す。その時、馬上豊かに草刈に行く美しい女は、彼女と同じ上の近道を取るように私を誘った。私は平静な心の動揺を惧れて、好意を謝して下の道を進んだ。

O, ye'll tak' the high road, an' I'll tak' the low road, an' I'll be in Scotland afore ye

……

スコッチ・ハイランドの「ロッホ・ローモンド」。これもいけない。

私は眼をつぶる。子供たちの一斉の訴えに困惑した父親のように、耳をふさぎ、眼をつぶる。

さあ、出て来るがいい、誰でも。私の出した手の先に最初にぶら下った者が先ず語られるだろう。だがお前たちは何れも互いに関係し合っている網の目のようなものだ。誰一人として孤立した存在というものは無い。語られない者といえども語られる者の支柱であり、台紙であり、それを支え、それを引立て、それに一層豊かな雰囲気と意義とを与えるものなのだ。

万物照応する抒情詩の世界には、「一将功成つて万卒枯る」の譬えは無い。

*

一天晴れて日は暖かい。物みな明潔な山地田園の八月の末。胡麻がみのり、玉蜀黍が金に笑みわれ、雁来紅の赤や黄の傍で、懸けつらねた干瓢が白い。この土地で高蜻蛉と呼ぶ薄羽黄蜻蛉の群が、道路の上の空間の或る高さで往ったり来たりしている。

私たちはのんびりした気持で村道を行く。道の左手は丘、右手は八丁地川の流れをへだてて、向うの丘の麓まで次第に高まる水田の雛壇。流れの岸には鬼胡桃や河柳が列をつくって、子供がは、や、を釣り、山羊が草を食む水辺に涼しい影を落としている。

ふりむけば少しのけぞった蓼科山。だが私はもう少し前から、御牧ガ原の空に舞っている一羽の鳥を、鷹ではないかしらと気をつけている。

シャンパンのように澄んで爽かな、酔わせる日光。ガブリエル・フォーレの、フランシス・ジャムの秋。健康な胃の腑が火串であぶった鵜の味を夢みる秋……

私たちの前を一人の年とった百姓が行く。畠からの帰りらしく、空になった竹籠を天秤棒でかついでいる。うしろから見れば只の小柄な一老農夫に過ぎない。

「あれが千野喜重郎さんです」と、私の連れが小声で教える。

「そうか。あの人がそうか」

私は指に挟んだ巻煙草を捨てる。御牧ガ原の鳥の姿も、食いしんぼうの夢想も捨てる。

連れの引合せて初めて会った千野さんは、もう頭の大分禿げた、童顔に顎鬚をたくわえた、人を見る眼に一種の光りのある、どこか禪僧とか一流の達人とかを想わせる老人であった。知っている人は、あの霞網の名人小島銀三郎翁を思い浮べれば、ほぼその風貌の見当がつくであろう。

「尾崎さんがあなたの標本を拝見したいと云われるのですが」

私の連れは郷党の先輩に対する丁寧な言葉遣いでこう云った。

「そうかね。あいにくもう直き忙しくなるのだが。年寄だから別に働くことも無いが、ただ遊んでいるのも勿体ないからな」

私は例によって、農村の人たちが私のような都会の人間に対して抱くことのありそうな無言の非難を感じ、白眼を感じ、しかもその人々に向って、自分の理由を事々しく説明することもできないという、あの複雑な困惑の情をまたしても経験した。

「お忙しければ又今度の時に」と私は云った。

「いや、昼の休みの時ならば構わない。もっともそのくらいの時間だと、せいぜい禾本とカヤツリグサ科ぐらいしか見せられないが」

昼食後の休憩時間は、この辺では大概一時間である。その間に見せて貰うことのできる腊葉が、「せいぜい」禾本科と莎草科だとは……

この老農千野さんは、北佐久郡で有名な植物研究家である。その所蔵の乾腊標本は幾棹かの簞笥に一杯だと云われている。翁の発見にかかる新種も少くない。去年発行された『長野県北佐久郡植物目録』という堂々たる植物志のための調査と編纂には、九年間、終始委員会の主^めのように

なつて働いた。

ただ見れば一個草莽の野叟に過ぎない。しかし具に見れば一種の風格をそなえた、世に隠れたる篤学の士である。

だが己れを持すること甚だ高く、狷介に見えるこの翁は、後で聞けば、私がこの地へ来る日を待ちわびて、もう一と月も前から屢々私の義弟に尋ねていたのであった。佐久の人に特有なあの内気さで、顔を赤らめながら。

「東京の客人は未だ見えないかね。来たら見て貰いたいものが色々有るのだが……」と。

それならばわれわれは、他人を判断するのに急であつてはならないだろう。辛抱づよく、細心に、或る日突如としてその真情の薔薇の内部を見せる固い蕾を、今日は信じつつ待つべきであろう。

北佐久の大蒐集家、隠れたる篤学者よ。渡り鳥のように来年の夏もまた私は来るでしょう。その時こそは禾本科からと云わず、もっと初めの変形菌部から、先ずあなたの村のクダホコリカビから、長い長いエングラの自然分類の順序のまにまに、あなたの案内で日を重ねて菊科にまでも及びましょう。時々はお互いに休みながら。茄子や胡瓜の香の物でお茶を招ばれる、あなたの土地の夜の「お九時」の団樂の中で……

*

二人の息子が東京からの客人と蓼科山へ登るといふ日の朝早く、まだ東の丘の上に大きな「天